

第IV章 農村調査・ワークショップ報告

第II章に記したとおり、今回調査団は「サバ州農村女性地位向上計画」マスタープラン作成のために、2002年9月より実施されている11のパイロットプロジェクトのうち、①「遠隔地農村女性への啓蒙・教育活動拡充プロジェクト」、②「未利用資源および廃材活用プロジェクト」、③「観光開発に沿った地場製品販路拡大プロジェクト」の三つのプロジェクト（6該当村）を調査した。以下、調査団が見聞きした農村の様子と生活改善の現状、およびこれに対して生活改良普及員より出されたコメントについて、プロジェクトごとにまとめる。

（1）「遠隔地農村女性への啓蒙・教育活動拡充プロジェクト」

1) パンダン・マンダマイ村の様子

幹線道路を離れて村に着くまで30分間未舗装道路を四輪駆動車で走行した。訪問時は雨季の終わりだったので数ヵ月前より状態は良いそうだが、それでもぬかるんでおり我々の乗った車も大きな水溜りにはまり、降りて車を押さねばならなかった。また伐採した木材を運搬する大型トレーラーが轍を深め、そこに雨水がたまり道路の状況をさらに悪化させているようだった。

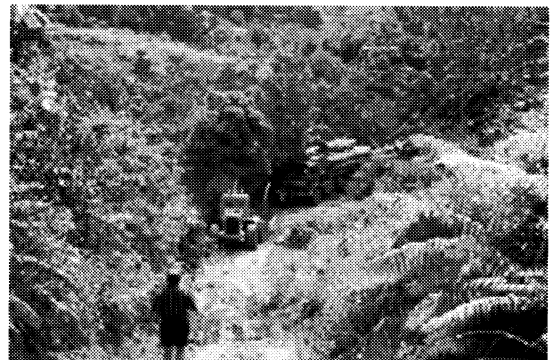


写真7. パンダン・マンダマイ村までの道路

山がちな地形で、民家も斜面に沿って建ち、水汲み場、ボート着き場である川、川沿いの畑に行くには細い坂道を通らなければならない。人一人通れる幅の獣道のような通路を皆が歩くため、ぬかるんでいて滑りやすく歩きづらい。人とすれ違う時は、やぶに入ってよけなくてはいけない。



写真8. パンダン・マンダマイ村の様子

水は雨水を飲用とし、川の水を洗濯、沐浴用に利用しているという。トタン屋根を使っている家では雨樋をめぐらせ、ドラム缶に溜めている様子も見られた。

電気はもうすぐ開通するそうで、村内には電柱が立ち電線も所々めぐらされていた。村の子どもも多くは村内の小学校に通っているが、近くの街ピタスに親戚がいる場合はそこに下宿し、ピタスの学校に通う子どももいるようだ。

我々が到着した時は、村の集会所に女性と子どもを中心に50人くらい集まってきており、ゴングという銅鑼に似た楽器を男性が演奏し、3人の男女が伝統舞踊を披露してくれた。

2) 生活改善の現状

2002年10月に「動機付け」のための2日間のワークショップを開発調査実施調査団が主催し、約30人の村の女性が参加した。その際に興味を示した女性6人が紙漉きのワークショップにこれまで数回参加しているという。

遠隔地ということもあり女性は村から出る機会が少なく、買い物も男性に依存しているようだ。女性が村に閉じこもりがちなので、外から来る情報や人は何でも珍しく、真新しく感じており、新しいものを一生懸命吸収しようとしている段階で、ワークショップの参加率は非常によく、また態度も真剣そのものだ。

村全体に関する改善点は、道路、水事情も含め山ほどあり、何からどのように手をつけていいかわからない、また自分たちで現状を変えられるという認識もないようであった。不便ながらも自分達は何十年も続けてきた生活が全てで、この状況を変えられるのは行政やその他の村外からの手によるしかないと期待する態度と、自分達ではどうすることもできないという諦めの様子が見られた。

写真10. 生活の要となる川

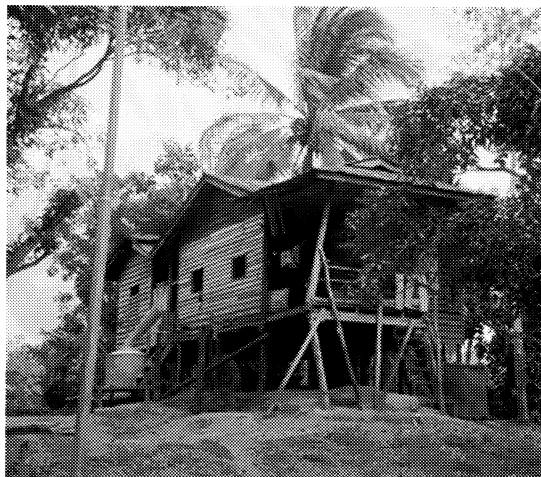


写真9. 雨水タンク



3) 生活改良普及員のコメント

① 社会基盤整備に関して

村のインフラの整備は、一体どこから手をつけていいかわからないという村人に対し、次のようにコメントをした。漠然とした課題については村全体で具体的に話し合うことが先ず必要である。例えば表1のように、今困っていることを全員でリストアップし、その問題点を「どう解決したいか」主体的な視点で対応策を練る。次にそれぞれの対応策を男性、女性、村全体、行政の「誰が対応するか」によって分け、最後に「いつ対応するか」によってすぐやること、準備が必要なこと、長期的に取り組むことに分けて取り掛かるのはどうだろうか。¹² (表1参照)

¹² 以下、生活改良普及員の実際のコメントを、この章では斜体字で表す。

表1：農村開発課題検討例

	課題	対応策	誰がやるか	いつやるか
①	村へのアクセスをよくする	幹線道路から村までの道を整備する	男が行政に頼む	準備が必要
②	村内の環境をよくする	隣の家への道を整備する	男	すぐ取り掛かる
③		水汲み場までの道を整備する	村全体	②の後取り掛かる
④		道に花を植える	女	③の後取り掛かる
⑤	特産品がない	④の花を紙漉きを使う	女	④の後取り掛かる
⑥	水を確保する	簡易水道を設置する	男が行政に頼む	準備が必要
⑦		軒下に雨樋を巡らせる	男	次の雨季に取り掛かる
...

② 紙漉きプロジェクトに関して

村で見せてもらった手作りの紙のうち、草花と一緒に漉き込まれ工夫の見られる一点を選び、これは商品化できるというコメントを繰り返し、制作者に継続して取り組むよう励ました。どうすれば草花が色褪せないように漉き込めるかという技術的な指導や、積極的に街に出て売るなど売り方のアドバイスもした。

村人からは、紙を漉いても村では売れないという悩みが打ち明けられた。これに対しては、「村の産品は村では売れないものだから、街の市場で売ったり、フェスティバルをひらいたり、紙作りワークショップの時でも皆の作品を持ち寄って売りあえばいいのでは」というアイデアが出された。また買い物には夫とともに出かけるようにし、街に出て何が売られているのか、何が売れているのか見て回るとよいというアドバイスもあった。



写真11. カリプオン村建設中の市場

(2) 「未利用資源および廃材活用プロジェクト」

1) カリプオン村の様子

村内をアスファルトの敷かれた幹線道路がまたぐことになっており（現在は途中まで開通）、同時に水道、電気も整備されつつある。現況では、電気水道の完備された家や、未整備の家、敷地が道路予定地にかかりこれから移動させられる家など、インフラ整備状況は各家によって様々であった。またピタスの街に近く道路事情が良いこともあり、ピタスに通い賃金労働している村人も、若者を中心に多くなってきているという。村に残っている人も、農業のかたわら道路工事の日雇いに出たり、道路沿いに小さなキオスクを構えたり

して現金収入を得ているようだ。積極的に機会を捉えている人とそうでない人で村内の経済格差が広がりつつあるように見受けられた。

集まった女性の服装や持ち物からも、前日に訪れた村よりは収入があること、ある程度生活が安定していることが察せられた。軒下に花が飾られたり、窓に工夫があったり、個人個人の家はきれいに整理されている一方、毎日多くの人を通るであろう集落広場への道のぬかるみには、ただ板が敷いてあるだけで不安定な状態のまま老朽化しており、メンテナンスされず放置されている様子が対照的であった。



写真12. カリプオン村の住居

2) 生活改善の現状

女性グループは、ワークショップで習った通り、これまで利用したことがなかったバナナや芋の葉などを用いた紙漉きをしている。問題点は、道具が足りないこと、仕上がった紙を漂白する技術がないこと、メンバーには仕事を持っている人もいてなかなか皆が集まれないことなど。また、紙を生産しても売れるのかという不安をもっているようで、確実に売れそうな芋チップやココナッツミルクを使ったお菓子の加工技術も学びたいという提案があった。



写真13. カリプオン村女性グループ作成の紙

行政の支援で村に市場施設を建設中で、今年の夏ごろには週に一度市が立つようになる予定。女性グループでブースを借り（市に出店するためにはブースの使用料を払う）、製品を売ることができそうだ。

3) 生活改良普及員のコメント

① 生活時間に関して

このグループの女性には独身で仕事を持っている女性、専業主婦、子育てをしながら仕事をしている人と3分類できるが、年代、仕事・家事・農業における役割も違うようだ。それぞれの生活パターンを知るために、平均的な一日の過ごし方について聞いてみた。

表2：生活時間調査（インタビューを基に作成）

	村の女性 a、専業主婦 (11 ヶ月の赤ちゃん がいる)	村の女性 b、独身、24 歳 町で仕事している	村の女性 c、村でキオスク を営んでいる、50 歳くらい
4:00			起床、朝食準備
5:00	起床	起床	畑仕事かジョギング
6:00	朝食準備	準備	キオスク開店、店番
7:00	水浴び、子どもの世話	出勤、仕事	
8:00	洗濯		
9:00	昼食の準備		
	昼食		
12:00	休憩		
15:00	家の仕事		
16:00	夕食準備		
17:00			
18:00	夕食		夕食
19:00	休憩	自由	
21:00		就寝	
22:00	就寝		
23:00			就寝

表2を用いてグループで集まるのに都合の良いのはいつか話し合い、週末の昼間なら皆集まることができると合意した。何も考えずに毎日を過ごしていると、いつも忙しく、いつも何かに追われているような気がして、自分には暇はないなどと思いがちである。でもこうやって見てみると案外時間は作れるものだと気づく。時間を有効利用して、ミーティングの時間を捻出し、活動に励んで欲しい。また、台所改善をすると、家事にかかる手間隙が少しでも軽減され、主婦の時間を作りやすくなる。こうやってできた時間を他の活動ができるよう工夫してみたい。

② コンクールの開催に関して

この村の台所は右の写真のような3種類に大きく分類できる。同じ村内にこれだけバラエティがあるのだから、このまま台所コンクールに使える。コンクールといっても審査基準はこちらが提示するのではなく、どういうコンロが安全か、物の配置はどうするのが使いやすいか、どの高さでコンロを置くのが疲れないか、こういったポイントで村人がお互いの台所を覗き合い、利用しあって、話し合うと良い。誰が一番になるかが重要なのではなく、どうすれば自分の台所が使いやすくなるかを考えることを目的とする。さらに、人に台所を見せることを意識して、それぞれが整理整頓を心掛けるようになると一石二鳥となる。



写真14. カリブオン村のカマド①

③ レシピの記録に関して

この村には若い人に読み書きのできる人が多く、年配者にできない人がいる。若い人は年配者に伝統食、郷土食を学び、絵を使ってわかりやすく書いたレシピ集を作ってはどうか。その際郷土料理パーティーを開催して、皆がおいしいと同意するレシピを残していくことも一考である。また、地域で使われている薬草の知識を「薬草集」としてまとめてみてはどうか。消えていく伝統を記録することも生活改善の大事な活動の一つである。



写真15. カリブオン村のカマド②

④ 未利用資源、廃材活用に関して

未利用資源を、既存技術を使って活用してこそ、村で生きるのではないか。

雨季に紙作りをしたため、うまく乾かず失敗したようだが柔らかい紙がたくさんできてしまうのであれば、例えば丸めてブローチにするなど、逆にこういった性質を利用した加工を考えてみてはどうか。失敗を失敗としてだけ捉えるのではなく、失敗から工夫する知恵を生み出してほしい。



写真16. カリブオン村のカマド③

(3)「観光開発に沿った地場製品販路拡大プロジェクト」

1) 農村の様子

調査したのは郡を上げて観光開発に取り組むクダツ郡にある4ヵ村で、それぞれ車で10分足らずで行き来できる距離にあるにもかかわらず、これまでお互いにライバル意識があるのか、あまり協力し合うことがなく、ばらばらに活動していた地域だった。行政組織の地域観光開発局もこの地域の住民を一堂に集めることはしてこなかった。



写真17. 養蜂に取り組むゴンビザウ村

2) 生活改善の現状

開発調査実施調査団がこの地域でパイロットプロジェクトを始めるとき、この4ヵ村に携わっている地域観光開発局をはじめとする行政組織と住民でワークショップを開いた。住民同士はこれまで共同作業や情報交換などしたことがなかったようだが、山口県の一村一品マップに興味を示し、この地域でこういった地図を作ろうと数ヵ月前から話し合っている。実施調査団側は、一村一品運動は各村が何かを生産することが目的なのではなく、地域を上げての「運動」に展開させ地域活性化に結びつけたいという意識を持っており、この目標に向かって活動を開始したところである。



写真18. 伝統的なゴング作りに取り組む
スマンカップ村

3) 生活改良普及員のコメント

4ヵ村の住民で手作りした地図を元に、地域の観光マップを作り、観光ツアーを組んで観光局に売り込むのはどうか。例えばバンを手配し、スタンプラリーのように4村全て回ったら景品をあげる、2泊3日くらいの日程で、一日目は蜂蜜作り体験、2日目はゴング作り体験などロングハウスに泊まりながら土地のものを体験できるコースを企画してみてもどうか。一村だけで観光開発はできないのだから隣接する4村の地の利を活かし、協力し合うよう仕向けることが重要だろう。



写真19. ビーズ作りに取り組む
ティナンゴール村

住民同士を交流させる手段として、各集落の点検をしあうという案がある。観光客を呼ぶにはまず村がきれいで魅力的でないといけないのだから、そのためにお互いの集落の環境、また、客の迎え方などをチェックして、改善点を話し合わせるのもいいのではないだろうか。これを機により雰囲気地域作りができるといい。



写真20. 伝統的ロングハウス宿泊施設
運営に取り組むババンガゾ村

基本的に観光開発は地元の人を楽しめるような工夫があって成功するものである。特に外国人だけを当てにしてはうまくいかない

と思われる。住民間で内発力を互いに刺激しあってこそ、持続的なプロジェクトになる。

山口県では都市と農村の交流を図り、県民の県内観光を促すための「県内 200km 観光コース」を企画した。民芸品や地元産品が売れるようになり、農村の人たちがとても元気になったという事例がある。

(4) 地方普及員に対する生活改良普及員のコメント

第八章に記すように、今回普及員の実際の活動を視察することができなかったのは残念だが、印象として普及員の現在の活動は、組織から与えられたプログラム（各種研修や紙作りなどのワークショップ）つまり上から与えられた仕事をこなしていくことに精一杯で、自分の足を使っての村回りや、独自の活動ができていないようであり、また、そういった活動が上からも指示されていないように見えた。

1) グループ活動について

女性のグループ活動を支援しているが、生活改善のためのグループは、ただ単に技術を習うだけの集団では発展がない。自分たちの知恵と工夫と技術を持ち寄って協力し、自分たちの暮らしを良くしていくという目的を持って活動する集団として育てていくことが普及員の役割である。技術を持ち込むことはたやすい。しかし、それをどうやって伝えるかが普及員の腕の見せ所であり難しいところだが、一緒に活動する人を育てる、その過程で普及員も育てていくものである。

2) 活動計画について

普及行政に携わる人に聞いても、現場で活動している普及員に聞いても、「この地域をこうしたい」というビジョンが明確には伝わってこなかったが、普及活動には長期目標と実施計画が不可欠だろう。実情に変化をもたらすためには、長期計画がなくってはならない。長期計画は普及員間（前任－後任）の共通認識を徹底するのにも有効である。指導計画は毎回村に行く前に立てるもので、行き当たりばったりの活動をし、活動が終わってから報

告書をまとめるだけでは意味がない¹³。

例えば長期目標と毎回の到達目標を明確にするために、簡単な活動計画（表3参照）を作ってはどうか。こういった実施計画は、自分のため、上司や同僚に自分のしていることを判ってもらうためにも有効となる。また、普及員は対象地域の実情把握のために報告書、センサスなどを参考にし、実際に見て、話を聞いて情報収集することも大事な活動である。

表3：簡易年間活動計画表

	1月	2月	3月	4月	…							
活動計画												
到達目標												
長期目標												

3) 技術について

研修で取り上げていることは紙や石鹼作りなど村人にとって真新しい技術の指導が主なようだが、こういった外からのものを村に持ち込むには、まず、普及員の技術がしっかりしていなければならない。必ず成功させ、村人を喜ばせ、この技術を学びたいという気持ちにさせることが第一歩として大事ではないか。「知る、分かる、やる」が活動の基本である。すなわち、1回目の会合で住民が自分たちの問題に気づき、2回目の会合で、例えばなぜ紙作りをするのか自分たちで納得し、計画する。3回目に自分たちで（材料／アイデアを）持ち寄り、やってみる。この方法なら自分たちが喜んでやるし、長期的プロジェクトでも途中で迷うことなく、成功しやすい。

(5) 生活改良普及員のコメントに対する考察

レディング大学大学院 太田美帆

以上のような農村調査やワークショップにおける、生活改良普及員の行動や言動、地域住民との接し方などについて、背景にある日本の生活改善普及事業に関する解説を加えながら、調査団員としての所感と考察を述べる。

1) 生活改善の理念と手段

「生活改善」は「人の育成」である。しかも、その意図するところは「技術を持つ人の養成」を目的とする一般の人材育成は違う。「考える人の育成」を目的とする普及理念が、お二人の生活改良普及員のメッセージに徹底されていると感じた。それは、「普及員は技術者ではなく、指導者だ」と繰り返して述べられていたことから確認できた。また、生活改善は個人レベルだけではなく、グループの、ひいては地域全体の活性化を目指すものもある。

¹³ ビジョンづくりの重要性については、本報告書第七章に詳述

こういった前提条件の下、紙漉きなどの技術は手段として「生活改善」の目的とは明確に区別されている。料理講習や石鹼作りワークショップで習うものはそれぞれの技術でありながら、その技術は考えさせるためのツールなのである。ある生活改良普及員が技術を「飴玉」と呼ぶのも、技術は人の関心を引くもの、皆が欲しがらるもの、誰もが喜ぶものとして利用し、本来の目標へと活動へ展開していくための糸口だと位置付けているからであろう。台所コンクールや未利用品の活用、生活時間調査などの活動案は、住民に考えさせるための工夫にあふれている。

また技術はツールであるから、確実に役立たなければ意味がない。こういった意味で「普及員にとって技術は失敗してはならないものだ」と位置付けられている¹⁴ように感じた。

短期目標としての技術指導と、5年・10年先を見据えた長期目標としての人づくりは別のものである。よって普及員は毎回の活動の実施計画と長期計画の二つを作成し、両者を意識しながら日々の活動を進めていくことが重要なのだろう。今回視察したサバ州の普及員は長期目標を意識していない、あるいは全く掲げず短期目標だけで活動しているように見受けられた。ワークショップにおいてある普及員から「紙漉きを教えた。石鹼作りも教えた。次は何をすればいいのだろうか」という質問があった。短期目標だけを掲げていると、このように自分たちの進路を見失うのではと思われた。起業化のためのプロジェクトなら、商品となるものの技術を習得し、技術が確立できたら次は売るにはどうしたらいいかという課題が次々と見えてくるはずだ。長期目標がしっかりしていれば、一連の流れで努力する過程から次の課題が自然と見えてくるものである。課題が見えてくるということは、自分たちの状況を普及員も住民も理解していることの表れで、現状把握のできた地に足のついた活動が展開できているということだろう。始めの第一歩の取り掛かりを見つけるのが難しいのだが、普及員はそこに刺激を与え、後は実践を支援し、課題が自ら回転していくように、そのプロセスを追っていくことが役目なのだと思う。

2) 集団育成と普及員の役割

さらに、個々人に対する技術指導から村全体の活性化へとつなげていくためには、点と点を結んでいく作業が必要である。それが「集団の育成」と日本の普及員が呼ぶものである。つまり「人を集め、話し合わせる（**集団思考**）」、そして「問題点をグループで共通認識し、課題解決のための行動を起こさせる（**集団実践**）」ように活動を展開していくことが「集団の育成」である。具体的にいえば、自分たちの生活をよりよくするような、今日の生活よりは明日は少しでもましになるような、生活改善の工夫と知恵を出させる。一人一人が持つアイデアを持ち寄ることから始めるのがポイントである。知恵を出し、工夫し、考えることを積み重ねる、その習慣を住民が身に付けるように手助けするのが、普及員の役割である。こう考えると、普及員は必ずしも外から新しい技術を持ち込む必要はなく、また「何か教えなければ」と焦る必要もない。そうはいっても、日本でも新任の普及員は「技

¹⁴ これに対して、一般には普及員は完璧である必要は無く、住民とともに実験、失敗を繰り返しながら、あるいは住民を先生として習いながら、技術を確立していけばよいという考え方もある。

術指導」に固執しがちで、そこから抜け出す、あるいは人づくりが楽しくなってくるのに10年かかる場合もあるという。

どんな些細なことでも自分たちでできることから始め、達成感を積み上げていくことで、自信をつけ大きな活動へと展開していく。このように個人の、そして村の自主性を育て、民度（住民の意識）を高め、そして地域を巻き込んでいく。主役はあくまで住民で、普及員はファシリテーターという裏方なのである。「モノとカネで人は動くが、民度をあげるためには金は要らない」という言葉もあった。開発プロジェクトを企画するとき、忘れてはならないメッセージではないだろうか。

日本の普及事業も補助金制度や補助事業が始められるまでの約20年間、普及員は農業、保健、教育など農村開発に関わるあらゆるセクター間の連絡調整およびネットワーキングに励み、また、そのネットワークを活かし情報収集しながら技術を倣い、そして農家からは昔から伝わる知恵や地域特性を習いながら、暗中模索で活動を展開していった。この時期のバイタリティーにあふれる生活改良普及員の活躍ぶりは、予算や技術的サポートの得にくい普及員に対するアドバイスや活動アイデアの宝庫である。

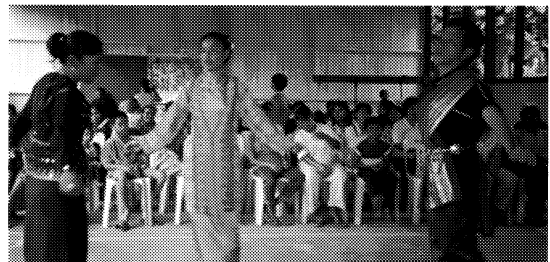


写真21. パンダン・マンダマイ村のダンス

3) 生活改善は伝統文化の保存から

パンダン・マンダマイ村を訪問した時、たくさんの村人が迎えてくれ、伝統的な踊りを披露してくれ、村を上げて歓迎してくれている気持ちが伝わってきて嬉しかったと同時に、村の老若男女がまとまっていて、文化を大切にしていると感じた。「自分たちの持っているものを誇りに思い、そして外に見せる、これが生活改善の基本だ」という生活改良普及員のコメントがあった。商品化のためには村の産物を有効利用し、村の特産品を作ることの大切さを繰り返し説かれていたのも同じ理由からだろう。

「生活改善は伝統文化の保存から始まる」とは、一見矛盾するのように感じるが、「生活改善」とは新しい技術を外から取り入れ、伝統を変えていくことではなく、自分たちの文化を見直し、古いものを大事に、良いところを伸ばしていくことであり、これが生活改良普及員に伝わる「改善の思想」だと心に留めておきたい。